

世界に目を向け、未来を見つめる。

[ボイス・オブ・ライフ]

2024.AUTUMN

VOICE OF LIFE

Take Free

08

パレスチナ

世界の無関心の傍らで

ヨルダン川西岸地区「占領」の実態

取材／安田菜津紀・佐藤慧



Dialogue for People

COVER PHOTO

ヨルダン川西岸地区ジェニンにて、イスラエル軍に自宅を破壊されたサミールさん。

「人種差別」という猛毒

2023年10月以降、イスラエル軍によるガザへの凄惨な攻撃が始まり1年が経つ。確認されているだけでも約4万人の命が奪われ、重軽傷を負った人々も数えきれない。ほぼ全域で市民は家を追われて避難生活を強いられ、国際社会はそれを止められず(止めず)にいる。深刻な飢餓が疑いようもなく人々の血肉を削いでいくなか、こうした暴力がすべて、「自衛のため」「テロリストを殲滅(せんめつ)するため」といった声とともに推し進められていく。国家主導の絶望的なほどの暴力が、個々の命をすりつぶし続けているのだ。

けれどそもそも、こうした惨劇は「2023年10月7日」に突如始まったものではない。世界大戦以降棚上げにされ続けてきた「人種差別」という猛毒は、イスラエル建

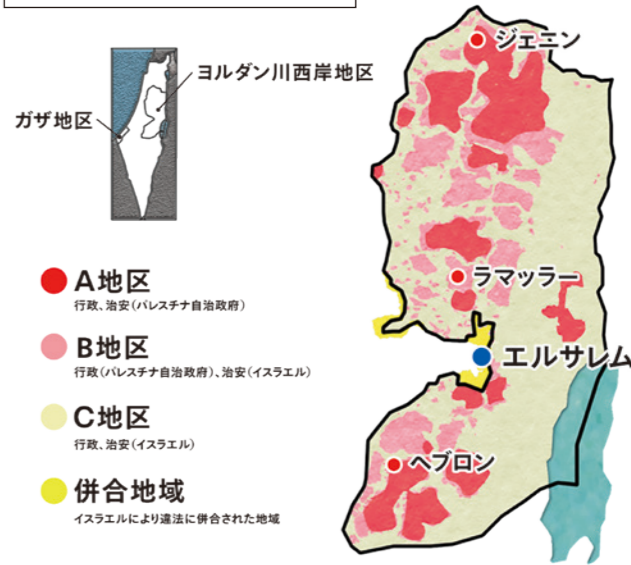
国という形で新たな排除を生み、今に至る恐ろしい虐殺が行われている。

そして国際法を無視した暴力や略奪は、ガザ地区だけで起きているわけではない。ガザ地区とは飛び地となつている、同自治区のヨルダン川西岸地区では、イスラエル軍による「占領」が常態化し、国際法違反の人権や襲撃が続いている。すでに重要な資源や土地はイスラエルにより強奪されており、パレスチナ自治政府が「行政」と「治安」、どちらも管轄しているのは西岸全体の約18%に過ぎない。

そのわずかに約18%程度という「自治」もまた、現実とはほど遠い。ジェニン難民キャンプの位置する地域は、パレスチナ自治政府が「行政」「治安」、そのどちらも管轄する「A地区」と呼ばれる区域(地図参照)のはずだが、イスラエル軍の襲撃は日常茶飯事で、特に「10月7日」以降は、「2〜3日に

Palestine

ヨルダン川西岸地区



日常的な軍事侵襲

1度は襲撃がある」と地元住民は語る。

ズズズズズ……という、空気をふるわず重低音が上空にせまる。2023年12月28日、午前1時半——。パレスチナ・ヨルダン川西岸地区北部、ジェニン県中部の街の一角に広がる難民キャンプは、その時まさに、イスラエル軍による強襲を受けていた。1万4千人ほどの住人たちは、1948年のイスラエル建国に伴い土地を追われ、家を失った人々とその子孫たちだ。西岸地区内に点在する難民

取材



安田 菜津紀 Natsuki Yasuda

中東、東南アジア、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地の記録を続ける。TV、ラジオ番組などにもレギュラー出演中。



佐藤 慧 Kei Sato

アフリカや中東、東ティモール、自然災害の被災地などを取材。世界を変えるのはシステムではなく人間の精神的な成長であると信じ、紛争、貧困の問題、人間の思想とその可能性を追う。



[左] キャンプ内の道路はイスラエル軍によりあちこち掘り返されており、下水の溢れているところも。[右] コンクリートの建物がひしめき合うジェニン難民キャンプ。

パレスチナ

世界の

傍らの

VOICE OF LIFE

ヨルダン川西岸地区「占領」の実態



瓦礫の中から学用品を探すサミールさんの娘のミーナさん。

音の主は見えない。雲間からそそぐ月明りの静けさとは対照的に、数ブロック離れた路上からは銃撃音が響いていた。

ここでは、「銃弾の痕のついていない通り」を探すことが困難なほどに、そこかしこに暴力が刻まれている。「難民キャンプ」とはいつても、数十年という避難生活の間、テント群は密集した住宅地へと姿を変えていた。その崩れかけた壁面やシャッターには「殉教者」

の写真が貼られている。自治政府も安全を保障してくれない状況では、自衛のために武器を手にとる若者も多い。イスラエル軍は数台の軍用車両でやってくる。上空には軍事ドローンによる援護もある。そんなイスラエル兵たちと比べると、抵抗する市民の武器はおもちゃのようなものだ。しかしこうした襲撃は、国際報道ではほとんど報じられない「日常のこと」なのだ。

「人権」を礎とした社会を

「オレたちはここでは、最下層に位置するんだ」と、西岸地区出身の男性が語る。「イスラエル人の

中でも、白人がまず優位であり、他の有色人種は2級市民として扱われる。そしてイスラエルの居住権を持つアラブ人はさらに下。西岸やガザに暮らすオレたちは犬猫以下の扱いでしかない。

2023年の1年間で西岸地区では、少なくとも81人の子どもを含む507名が殺されている。8歳の少年、アダム・サメール・アル・グルルさんもそのひとりだ。

アダムさんはジェニン中心部近くの道路で友人たちと遊んでいたところ、強襲するイスラエル軍の兵士により頭を撃たれた。兄のバーさん(14)は血まみれの弟を必死に物陰へと運ぶが、即死だった。「イスラエル軍はアダムをテロリストと呼びますが、8歳の男子ですすよ?」と、長男のムハンマドさん(18)は語る。

同日、サミール・アルゴールさん(50)の自宅もまた、すさまじいほどの攻撃を受けていた。早朝5時、イスラエル軍はサミールさんの家を取り囲み砲撃を開始した。

サミールさんは娘のミーナさんら家族を連れて、家の中心にある部屋で身を縮めていた。その後壁が倒壊、小型のドローンが屋内に侵入してくる。「外に出ろ」と命令され、恐る恐る庭へと出たところ、そこには近隣住人2人の遺体が横たわっていた。

「イスラエル軍は『銃を持ったテロリストが屋内にいる、家族を人間の盾にしている』と主張しました

が、もちろんそんな人間はいません。ですが兵士はテロリストがいないと確認した後も、ブルドーザーで壁や庭を滅茶苦茶にしていきました」

ガザで続く虐殺を、一刻も早く止めなければならぬ。けれど、それですべてが終わるわけではない。これまで何十年にも渡りパレスチナで続いていた不条理と、今も行われている非人道的行為に終止符を打つこと。そして国際社会の根本にある「差別」と向き合い、「陣営」ではなく「人権」を礎とした社会を構築すること。そのために考え、語り、行動することが求められている。

◎安田・佐藤



[上] 子どもたちの傍らで破壊と殺人が続いている。[下] 街中に貼られている「殉教者」の写真。イスラエル軍はこうした写真も乱暴に削がっていく。

COLUMN

「無数の悲劇のひとつ」ではなく



シーリーンさんが狙撃された現場には追悼の壁画が描かれていたが、この場所もイスラエル軍により破壊された。

侵略や殺人が日常化している西岸地区では、その状況を伝えることも容易ではありません。2022年5月には、カタールのメディア、アルジャジーラのジャーナリスト、シーリーン・アブー・アークラさんがジェニンで殺されています。彼女はパレスチナ系アメリカ人で、その日はイスラエル軍によるジェニン侵攻を取材中でした。明らかにジャーナリストとわかる恰好をしていたシーリーンさんは、頭を狙撃され、その後搬送先の病院で死亡が確認されました。イスラエル政府は「故意ではなかった」としますが、イスラエル軍が明確な意図を持ってジャーナリストらを殺害していることは、この間のガザ侵攻でも明白です。「2023年10月7日」以降、ガザ地区内だけでも殺されたジャーナリストは100人を超え、虐殺される側の声は益々届きにくくなっています。「なぜ世界がこの状況を放置しているのか、私には理解できない」と、西岸地区南部の街、ヘブロン在住のジャーナリスト、ルアイ・サイドさんは語ります。「何が間違っているかこんなにも明らかなのに、なぜ国際社会は止めようとししないのでしょうか」。今かろうじて届く声を、「無数の悲劇のひとつ」ではなく、「誰かの声」として受け止めたいです。

BOOK OF LIFE

パレスチナのことを
もっと知りたい方に!



パレスチナに生きるふたり ママとマハ

文・写真: 高橋美香
かもがわ出版

バスマ(ママ)さんは、ヨルダン川西岸地区のピリン村に暮らしています。畑をたがやし、ヤギの放牧や養蜂をして、野菜やチーズ、ハチミツを売る。かまどからは焼きたてのパンの香り。そんなのかな日常は、ある日突然破られます。イスラエルによる「入植」、そして「分離壁」の建設……。土地も畑も、奪われてしまいました。ジェニン難民キャンプに暮らすマハさんもまた、幾度となく繰り返されるイスラエル軍の侵攻により、大切なものを奪われてきました。マハさんの夫のイマードさんも、イスラエル軍に酷い暴力をふるわれた末、病気になる、寝たきりとなってしまいました。大切な人々が健やかでありますように。ここで大切な人にかこまれて、年老いていきたい——。そんなマハさんのささやかな願いは、何度も、何度も、砕かれます。パレスチナに生きるふたりの女性たちの声を通して、そこにある小さな願いや祈り、そして声に、耳を傾けてみませんか？

カルチャーでつながる

CONNECT THROUGH CULTURE



刺繍のパーカーも
お気に入りです!!

パレスチナ発のファッションブランド FOVERO

イスラエル北部ナザレの街は、8万人近い人口の多くをアラブ・パレスチナ人が占め、イスラエル内の「アラブの中心地」とも言われています。この街の通りを歩いていると、ふと気になるものが目に留まりました。「スイカ柄」の水筒や、パレスチナ刺繍をモチーフにしたトレーナー、「Enough is Enough (もう十分だ)」と書かれたTシャツ——。パレスチナに関連するグッズは色々ありますが、ここにある商品はどれも見たことがありません。実はこちらは、2019年に立ち上がった「FOVERO」というブランドのお店だったのです。「もともと家が服飾に関係する仕事をしていたのですが、何かパレスチナからのメッセージを伝えられる商品を作りたいと思っていました」。そう語るのは、創業者のジャウダッドさん。メッセージを發しつつ、服としてもおしゃれで品質の良いものを届けたい。そんな思いで作られたグッズは、「パレスチナとつながる」架け橋でもあります。



「ぜひFOVEROの服を
着てみてください」
ジャウダッドさん



FOVERO
<https://www.fovero.ps/en>



D4P職員のつぶやき

中山 大輔 / D4P管理部



8号目となる今回、パレスチナを大々的に取り上げた号になりました。個人的にはこうした業界に入る一番のキッカケがパレスチナだったので、とても感慨深いです。2014年にパレスチナとイスラエルに行ってから10年が経ってしまいました。あの時言葉を交わした彼や彼女たちの姿が、改めて脳裏に浮かびます。D4Pでは引き続きパレスチナやイスラエルについての発信を行ってまいりますので、引き続きよろしくお願いいたします。



Dialogue for People

認定NPO法人Dialogue for People (ダイアログ・フォー・ピープル/D4P)

国内外様々な地域で社会課題の渦中にある人々取材し、写真や文章、映像などさまざまな表現を通じて、「伝える」ことを主軸に活動するメディアNPOです。どこか遠くの問題に思ってしまう出来事について、誰もが考え、自分の役割を見つける機会を創造し、社会課題の解決につながるきっかけを生み出していきます。

d4p

検索

<https://d4p.world>

D4PのSNS一覧はこちら



各地での取材をYouTubeで配信!



安田菜津紀と佐藤慧が、気になるニュースや出来事をラジオ形式で毎週水曜に配信中。ゲストを迎える回ではインタビューを交えながら、様々なテーマを深掘りしていきます。

D4P YouTube Channel YouTubeで検索!

d4p

検索

